

# たくほどは 風がもてくる 落ち葉かな

良寛さま

良寛さまは、長岡藩主からの招きを断ったときにこの句を示された。

落ち葉を焚くといえ、焚き火と思うのが当然だろう。しかし、この句の意味することが単なる焚き火だとしたら、藩主は良寛さまにいたわりの言葉を残して引き下がる訳が無い。また、この句が大安心の心境を示す、と書く人もいないだろう。安心（あんじん）とは、心の安らぎ、あるいは不動の境地を意味する。

良寛さまが五合庵を出て、乙子（おとこ）神社へ移ったのは六十歳の時という。不自由な生活。寒さが増してくれば、余計身にこたえる。暖をとるのも、粥を炊くにも火がいる。その火を落ち葉でまかなう。

それも、他者にさせるのではない、自ら行う。枯れ枝があれば使うだろうが、枝を折っておいて使う訳ではない。何の生命も傷つけはしない。「落ち葉がなくなったら」とか、「雪が積もったら」とか、思わない。今、ここで落ち葉なのだ、落ち葉しかない。

我慢してぎりぎりのところ、限界状態での生活。そこにあって身を置いて生きようとした、その道を選んだ。不満とか、満足を超越した毎日。苦とか楽とかを通り越した世界。

まさに道元禅師が「正法眼蔵・現成公案」（しょうぼうげんぞう・げんじょうこうあん）の巻で説かれた「万法に証せらるるなり」（自分の周りのものすべてに証せられていく）である。

安心をも超えた空の世界。そこに生命があり、力がある。その勢いが、人に感動をあたえ、人を動かす。

良寛さまは、江戸時代に越後の国（今の新潟県）で活躍された曹洞宗のお坊さんです。多くの逸話（いつわ）が残されておりますが、その話は何れもおおらかで、ユーモアにあふれ人々の心をなごませていきます。

また、漢詩をつくり、和歌を詠み、書に親しんだ文学者としても慕われています。

しかし、本当の暮らしぶりは、並々ならぬ修行の毎日で、それは苦しいものだったに違いありません。けれども、その厳しさは、逸話の中や作品の中に微塵も感じさせません。

ここに挙げた俳句も、その日常をさらりと受け流し、とらわれの無い心でいることの大切さを今の私たちに教えているのです。

たくぼどは

風がもてくる

落葉かな

良寛さま

曹 洞 宗

神奈川県第二宗務所

第五教区 布教部・出版部